

経済学と聖書(4)

2020年5月29日(金)

関西学院大学経済学部

春学期チャペル

担当：井口 泰

経済学と聖書 「環境と経済」

讃美歌21 211 あさかぜしずかにふきて

曲 Felix Mendelssohn 作詞 Harriet E. Stowe

- 1 あさかぜしずかにふきて、
小鳥もめさむるとき、
きよけき朝より清く、
うかぶは神のおもい。
- 2 ゆかしき神のおもいに
とけゆくわがこころは、
つゆけき朝のいぶきに
いきづく野べの花か。
- 3 かがやくとこしえの朝、
生命にめさむるとき、
この世のうれいは去りて、
あおぎみん 神のみかお。

「被造物は、神の子たちの現れるのを、切に待ち望んでいます。被造物は虚無に服していますが、それは、自分の意志によるものではなく、服従させた方の意思によるものであり、同時に希望をもっています。つまり、被造物も、いつか滅びへの従属から解放されて、神の子どもたちの栄光に輝く自由にあずかれるからです。被造物がすべて今日まで、共にうめき、共に生みの苦しみを味わっていることを、私たちは知っています (ローマ8:19-22)」

昨年及び一昨年の5月から6月にかけて、信じられないほどの猛暑を経験したのを覚えていますか。世界各地で、山林の火事が鎮火せず、大都市で安全な水資源が不足し、海面が上昇するなど、異常気象による災害が顕著でした。こうしたなかで、欧州では、金曜日の午後に高校生が授業放棄して、「環境デモ」に参加することが広がりました。

地球温暖化の危機について、昨年9月23日に、国連の地球環境サミットがニューヨークで開催されたのを覚えていますか。スウェーデンの高校生グレータ・サンバークさんが、昨年の9月下旬の国連の地球環境サミットで訴えたことばです。“We are in the beginning of mass extinction”, “You have stolen my dreams and my childhood with your empty words,” “What you are talking about is money/ fairly tales of eternal economic growth.

国連の目標は、今世紀末までに地球の平均気温の上昇を1.5度以内に抑えることです。ところが、近年、温暖化は加速し、ドイツ・ポツダムにある研究所は、このままでは、2030年に1.5度、世紀末には6度も上昇し、地球は熱気球のようになる可能性があるという報告を出していました。

2020年1月、コロナ・ウイルスの感染拡大が伝えられ、その後、世界保健機関がパンデミック宣言を出しました。感染拡大を食い止めるため、中国だけでなく、欧米諸国やアジア諸国も、国境を超える人の移動が停止しました。世界の主要な地域で、「ロックダウン」といわれる措置が拡大して、消費・投資は大きく落ち込み、グローバルなサプライチェーンが傷つきました。

日本でも、4月に発令された「緊急事態宣言」は、5月下旬には順次解除されました。しかし、事業継続に苦しむ企業や商店は多く、雇止めが多発し、事態は依然として深刻です。感染防止及び医療活動の維持と、経済社会活動をどう両立させるかが、緊急の課題になっています。

こうしたなかで、今年の5月の晴れた日には、産業活動や交通量の激減で、空の青さと自然の美しさが際立って見えました。実際、世界銀行のGlobal Carbon Projectによれば、経済活動が今年6月中旬までに、昨年レベルに戻った場合でも、温室効果ガスの排出は、昨年よりも2-7%減少すると予測されます。ありえないことですが、ロックダウンが年末まで続けば、規制の程度により、3-13%減少するとみられます。国際エネルギー機関(IEA)は、今年の排出減少を概ね8%程度とみています。しかし、温室効果ガスは、2040年までに現在より30%も増加するとみられており、パンデミックとその対策が、温暖化の傾向を根本的に変えるような規模とはなりそうもありません。

こういうなかで、キリスト教会の発言や行動が乏しいことに、私は失望します。しかし、聖書が地球環境について、何も語っていないというのは正しくありません。

聖書において、「被造物」という用語は、少なくとも2つあります。ひとつは、生物をさしています。もう一つは、自然又は地球環境を指しているのです。私たちは、自然を美しいものと感じます。例えば、東北地方に旅したとき、車窓でみる光景に驚きに似た感動を覚えることがあります。しかし、自然を美しさだけから、眺めるだけでは一面的です。それは同時に、苦しみや衰退、死への恐怖を表現しているのです。悲劇的な自然のあり方に共感できなければ、地球環境の危機を深く知ることも、行動を起こすこともできないように思われます。

本日の箇所で、「被造物は虚無に服している」というのは、旧約聖書の創世記における「楽園からの追放」の逸話をさすものと考えられます。創造された世界が、暗黒の力に服従するとは、なんとも、皮肉なことでしょう。「滅びへの従属」という言葉からは、生態系の巨大なバランスにおいて、強いものが弱いものを、大きいものが小さいものを飲み込まれる運命の最中にあることを感じさせます。ただ、飲み込まれるだけなら、何のために創造されたのでしょうか。人間と自然が滅びることへの危機感は、黙示録に投影されています(ヨハネの黙示録21章・22章)。

こうして、生物の頂点にたつかのように見える人間は、自然との間で、敵意をもって向き合わざるをえないことが語られているようにみえます。人間は、多くのウイルスと共存して生命を保っていますが、病原性ウイルスの侵入に対し非常に弱いことは明らかです。

ところが、パウロは、「被造物は救いへの希望を持っている」というのです。敵意のなかで、苦しんでいかなければならない被造物が、どうして希望をもつことができるのでしょうか。

聖書において、被造物ということばには、土地や山々、あるいは水や空気といった、生物ではない被造物を含む用語が存在していることは重要です。人間が自然と交わり、自然と和解することを、この聖書の箇所は勧めているといえるのです。

キリスト教会で、聖餐式は、最後の晩餐を祈念すると同時に、人間と自然の共存への希望を意味していたはずですが。そのことも、現代では忘れられてしまったのではないのでしょうか。

経済の現実に戻ります。日本のGDPは、本年4月から6月の第二四半期に、リーマンショックを超える2割以上の縮小を経験した可能性があります。今や、感染防止のための経済活動の自粛が、巨大な力になって、襲いかかってきました。中南米の新興国では、資金流出と為替相場の暴落が、新たな経済危機を引き起こしています。

経済の実態の悪化で、3月に30%近くも暴落した株価が、現在、回復基調にあるのは、なんとも奇妙です。それは、過去に例のない経済対策の効果を期待するだけでなく、ワクチン・特效薬の開発と普及が、1年程度で起こることを想定されているように思われます。これは、また、希望的観測です。

困難のなかにあって、過度に恐れるのでなく、日々、平安と希望を失わず、新たな生き方にむけて生きるように、勧められているのです。自分の努力だけでは達成できないと知ったときに、初めて、われわれは真剣に祈って、日々真剣に生きて行動するようになるのではないのでしょうか。